



機関紙

一水会

No.6
『夏号』

発行日/2016年5月1日
発行人/小川 游
編集責任者/さきやあきら
発行/一水会事務局
〒330-0074
埼玉県さいたま市浦和区
北浦和5-3-3 B-108
山本耕造方
Tel.048(816)8805
http://www.issuikai.org/
題字/有島 生馬

取材でのごことなど 小川游

さきや氏から、テーマは自由に何か随想風なものを...とのこと。

あれこれ考えてはみたものの、これと言って思いうかぶ話柄もないままに、絵かきさんを前にして絵の話をいうのも些か気がひけて、難儀なことではありますが、この二十年あまり続けている北海道での取材の中から取り上げてみます。

ひと口に取材と言っても、いつも予定通りに目的が叶うとは限らず、天候をはじめ、期待が見事にはずれたりすることは、風景を手がけている人ならば誰しも体験済みのことでしょう。さて、前おきはともかく、この絵について話します。

これは積丹半島で全く偶然見つけた場所を題材に描いたものです。『北の番屋』と命名して、第68回展に出品しました。積丹では当初、海岸線を取材したのですが、どうも思うに任せず、思いきって内陸部の方に入り込みました。そして、積丹岳を望む

辺りで、やっと落ち着いて写生をすることができました。何とか仕事ができたらそろそろ宿に戻ろうと、車を走らせてゆく途すがら、この風景に出くわしたのでした。北の風土感を余すところなく具えた自然、そして、そこにびたりとはまった建物の姿が何とも感動的で、これはこれは...とばかりに寒さも忘れて、しばしその場にはりついてしまいました。

帰宅後、現場でのスケッチ、写真などをもとに、3号、4号等の小品から50号まで、たて続けに数点試作のうえ、この120号にとりかかりました。小、中品では建物を画面のほぼ中央に配しましたが、大作では、かなり右へ寄せて、地面を十分に広くとり、大地の表情を伝えようと試みしました。描きおえた時には、じん

わりとした充実感のようなもの、絵かき冥利という気分を味わうことができました。この建物は、実際には農作業のための納屋ではないかと思えますが、題名を決めるにあたっては、納屋ではなく、番屋を採りました。

二〇一六年三月



北の番屋 120・F 油彩

ごあいさつ

小川游 作品館がオープン

皆様にはいつも一水会の活動でご協力を頂き感謝しております。

さてこの度、小川游先生の作品館が四月二十八日より北海道帯広市近郊の六花亭 中札内美術村に開館いたしました。広大な柏の林の中に相原求一朗、小泉淳作、小川游の三美術館が点在し、とてもロマンチックな場所になっています。

北海道に行かれた際にはぜひ足を延していただきたく願います。
●アクセス/北海道とち帯広空港から車で約一〇分。JR北海道根室本線・帯広駅西口から十勝バスで「六花亭 中札内美術村」下車。

第79回展から一水会展会場が拡大します

平成二十九年度、「第79回一水会展」から東京都美術館のロビー階が一

事務局長 山本耕造

四棟(全棟)まで使用できることになりました。このことで二段がけを余儀なくされていた状態がかなり改善します。今まで以上に自分の作品をアピールする好機として張り切つて制作をお願いします。

進歩員の設置について

運営委員会で慎重に検討を重ねた結果、第78回展から会員と会友の間に「準会員」を設けることになりました。

条件として、永年の実績から、受賞経験がなくとも会員と同等の安定した力があると認められた会友を対象とし、無鑑査となります。

(第78回一水会展) 出品の注意

出品申込書・出品票はコンピュータで処理をしますので、必ず「第78回展用」を使用して下さい。

新たな展望 第55回 一水会選抜展



三月二日から三月八日まで日本橋三越本店美術特選画廊にて第55回一水会選抜展が開催されました。運営委員、常任委員、三十三名とその他の選抜者三十四名の10号程度の作品六十七点と小品三十五点。出品総数一〇二点。三月五日のギャラリートークに二〇〇人を超えるお客様が集まりました。田島健次先生は金子みすゞや千利休の言葉を引用して美とは何かという話をされました。浅見嘉正先生は始めに一水会の成立や精神を説明し、数点の絵について解説されました。絵は自分のいいと思った事を継続する、生活の中からヒントを見つけて行く事が大事ということでした。三越特別食堂での打ち上げは三十八名が出席。初参加の方は今後の活動予定を披露し、委員からも制作する上での苦労や、心構えなど出席者全員が、メイクを持ち、和やかな交流の場となりました。

(西真里子記)



この度、静岡地区の一水会出品者による初めての作品展を開催いたしました。静岡地区の出品者は数年前から中部一水会の仲間入りをし、春の中部一水会展、冬の一水会名古屋巡回展に参加させていただいております。しかし、名古屋の会場まで地元の方々に足を運んでもらうことがなかなか難しいため、当地で一水会の存在をアピールしたい

と開催に至りました。出品者は七名と少人数ですが、今回は各自大作を三、四点、それに小品を加える展示内容となりました。地元での反響は大きく、期間中約一〇〇〇名の来場者があり、皆さんとても熱心に鑑賞されておりました。初回の開催としてはとても満足のいく作品展であったと思います。

また、期間中には中部一水会から田島先生、所先生がご来場され、励ましのお言葉をいただきました。次回開催に向けて、一回気持ちは新たにすることができました。今回の開催を機会に、静岡地区からの一水会展出品者が増えることを願い、また、お互いが切磋琢磨し、より良い作品を発表していくことを誓い合いました。

(鈴木喜博記)

第1回 一水会静岡地区作品展
二〇一六年二月二日〜七日
会場／クリエイティブ浜松ギャラリー35

深沢紅子野の花美術館 盛岡特別展・一水会選抜展

2016年3月25日～4月10日(盛岡巡回展)

春始め、三月二十五日から盛岡市の深沢紅子野の花美術館で第13回一水会選抜展が行われました。前日に運営委員の山名将夫先生と事務局の玉虫で展示準備、初日にはオープニング・ギャラリートークを行いました。岩手県盛岡市は石川啄木、宮沢賢治という文学の分野だけでなく、萬鉄五郎、松本俊介、舟越保武など美術分野でも知的で清廉な作風で人々に深い共感を与える芸術家を生んだ土地です。深沢省三、紅子ご夫妻も情感豊かな作品とお人柄を通してその盛岡の地で多くの方々に影響を与え、今につながる文化の基を創った大きな先生です。紅子先生が一水会に所属されていたということで今年も作品を展示させていただくという幸せを実感しました。初日には岩手日報紙面に画像入りで大きく取り上げられ、東島末起理事長様、新聞社の方々、美術と深沢先生を愛されている皆さんが集まってくださり、熱心に話に聞き入ってくださいました。石田紘子館長様、重石晃子先生には二日間付きっきりで対応してくださり、美術館の『忘れな草の会』スタッフのみなさんの温かさに心地よい日を過ごさせていただきました。

小川游先生が昨年寄贈された作品も一階に展示されています。皆さんもぜひ盛岡へ！

(玉虫良次記)



会場では1300号の大作を出品された久保田辰男先生や山本耕造、木村毅の両先生の招待作品が正面で人気を

集め、会場内を埋める写真も目にする作品全五十点を熱心に鑑賞する来場者の姿であふれ、好評の裡に終始しました。また、開会初日には招待作家として来場された久保田、木村両先生を囲み、愛媛、高知の出品者で懇談会を開き、極めて有意義な時間を過ごすことができました。

今回の第3回展会期中の入場者総数は二五八



(竹村文男記)

第3回四国一水会出品者作品展

二〇一六年一月五日～十一日
会場／高知県立美術館 県民ギャラリー

1、2回展は愛媛県で開催されましたが、第3回展は四国山脈を跨いで高知で、ということになりました。

四国は峻険な山脈で南北に分断され、両県作家は昔から交流が困難でした。この機会に是非とも、高知県立美術館を会場としてお引き受けして開催いたしました。

集め、会場内を埋める写真も目にする作品全五十点を熱心に鑑賞する来場者の姿であふれ、好評の裡に終始しました。

また、開会初日には招待作家として来場された久保田、木村両先生を囲み、愛媛、高知の出品者で懇談会を開き、極めて有意義な時間を過ごすことができました。

「特集」

第13回

一水会精鋭展

昨秋の一水会展の会場で運営委員の担当者により選出された七十九名による50号一点ずつの展示。初日夕刻のレセプションには、国画会、示現会、創元会から来賓のご臨席をいただき、和やかにとりおこなわれました。このあと、五〇名が会場を移動して二次会、三次会へと余韻が続きました。会期中の入場者は一、五三七名、訪れた方々から「力作ぞろい」との言葉をいただきました。この展覧会の係は浅見文紀、相馬順子、栗原高光、久保博孝、滝沢美恵子の各氏。玉虫良次先生にひと言ずつ伺いました。

展評



玉虫良次先生

久保多貞夫 水の表現うまい。鳥のアクセントが曖昧。斎藤由美子 青がきれい。手前のポットなどの形が甘い。三輪由紀子 自然な姿。バックも自然。色や構図に魅力。茅野吉孝 クリアで気持ち良い。中心のモチーフは？ 久保慶議 テーマに沿った作り。細かい描き込みがほしい。滝沢美恵子 見せ方がうまい。文字などの装飾性の工夫を。保坂晶 二うまくまとまっている。中心すぎるか。相馬順子 いつも色の作り込みが上手。人物がかたい。間瀬徹 考えさせる。構図・色もう一工夫を。今城俊雄 色が爽やか。逆に言うどさらに生活感を。菅沼正則 良く描き込まれている。中心の舟の構図に力を。世良ツヤ子 スーテンの様な強さ。服のこだわりがほしい。新泰郎 空気感がうまい。直線の構図

構図が巧み。周りの整理を。小沼秀夫 描写力あり。物の向きに工夫を。久世夢二 新鮮だ。この大きさなら削れるものがある。土田佳代子 構成の巧さが分かる。瓶や野菜が具体的すぎ？ 真鍋弘子 頑張っている。石が良くわからない。河石正義 水辺の遠近感がうまい。さらに見せる部分を。才村啓 色の美しさと石膏の質感が良い。卓上が気になる。小笠原あい子 思いが伝わる。まだ、額が未消化。中山一昭 すっきりしていて良い空気。鳥がまとまりすぎ。熊谷弥生 色調が美しいが、椅子やバックが説明的。大野文子 独特のモチーフ。木が重なりすぎか？ 松澤泉次 良く描いている。物が硬すぎる感じ。飯塚和秀 色のまとまりが綺麗。暗い色調がもう一歩進んだら。鈴木喜博 硬質の美。布

に省略も。児島真澄 独特のモチーフ。左側がやや単調。山下審也 大きさが出ている。もつと抜けがあつたら。山本佳子 ずらした



の面白さに更に変化があつても。鮎川功 場の気持ち分かる。木々の表現をもう少し。李志宏 じっくり表現されている。顔中心すぎかも。北村春美 色の塩梅がちょうど良い。新聞の表現が硬い。辻齊一 土地の感じが伝わる。季節感をもつと。嘉納希代子 頑張った描写。右上の空間もつと抜けても。外山順子 珍しいモチーフを良く見せた。台上が弱いか。辻ノ内恵子 表したいものが良く表現。色をもう少し。板倉慶隆 描きたい

この人に注目⑥ 伊藤尚尋さん



伊藤尚尋さんは大阪在住で現在36歳、『公募団体ベストセレクション美術2016』に抜擢された気鋭の若手です。

〈聞き手〉加曾利光男
——一水会はいつから？

一九九八年の第60回展が初出品です。大阪芸大二年生でした。当時アルバイトしていた貸し画廊のオーナーに勧められたのがきっかけです。でも初入選から十年ほど生活基盤固めのために絵を描かない時期がありまして、70回展から再開しました。

——制作方法は？

スケッチを数多くして、現場で描きながら絵のイメージが出来上がります。さらにはパソコン上でほぼ構図や世界観を固めてから描いています。

ものが分かる。構図に工夫を。高橋よう子 季節感が分かる。スキの表現に動きを。安達久美子 流れのうまさ。構図と岩に説明でない位置を。岩池和代 色の鮮やかな纏まりがある。花がまだもう少し。服部則子 うち切り取り方。独自の物をさらに出しても。増田敏郎 山裾の自然感良い。何か厳しさも出て良いかも。森木和子 雰囲気がある。サイズが小さくても良かった。長坂千恵 力強く表現されている。黒っぽい色味をさらに。加曾利光男 新しい意欲が好ましい。マネキンの表し方か。平井芳夫 安定したデッサン力。色の幅がもっと大きくても。西真里子 色調の爽やかさでまとまっている。台下の意識を。木村毅 テーマ性がある。大きいサイズの画面で見たい。市川広美 白がきれい。タッチに動きがあっても良い。玉上佑子 明暗、色で見たい。シルエットの良さを再確認。久保直樹 線の複雑な空間。大きい色味に変化があれば。笠井隆良 モチーフの楽しさ。空気感に広がり。弓手研平 絵肌の重さと主題の不思議さ。デフォルメは？ 浅見文紀 黒の上手さ。さらに時間の表現へのこだわりを。杉田公子 綺麗さが出来上がっている。白味の変化がきれい。青木年広 爽やかな強さ。ポイントの物の位置に工夫か。中澤嘉文 中景から遠景の巧みさ。近景の構図にもう一つ。中島和長 構図の良さと表現のマッチ。どこを見せるか？ 久保博孝 空気感が巧い。人形の顔に焦点が集まりすぎか。栗原高光 広々として気持ちよい。鳥影の形がもう少し。中村哲泰 表現意欲が伝わる。中央の抜けはもつとあっても。寺岡克三 船の



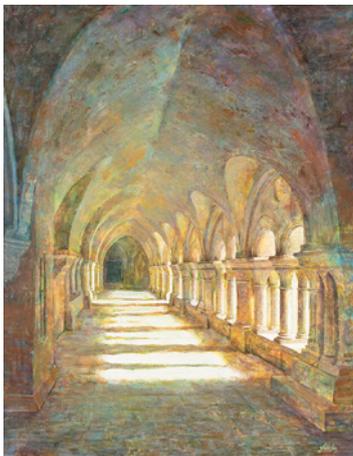
残された風景 久保 慶議



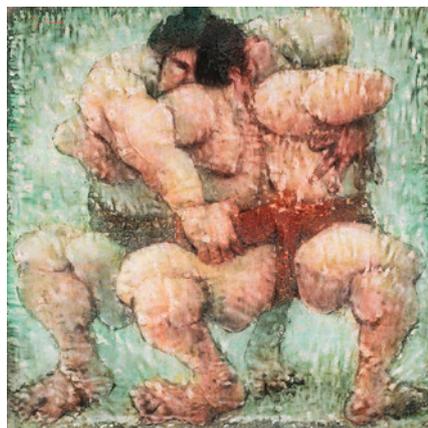
アトリエの娘 山本 佳子



小さな冬景色 浅見 文紀



回廊 宮島 百合子



力士図 弓手 研平



卓上風景 土田 佳代子

大作となると仕上げるまで二〜三ヶ月かかっています。常に小品を十数点ほど同時進行していますので、そこで得たものを大作にも反映していきます。

——好きな画家、影響を受けた画家は？

逆に嫌いな画家がいないです。幼児の落書きを見ている飽きないです。結構趣味で写真を撮っている方に影響を受けています。こんな場所があるんだとか、風景の切り取り方があるんだとか。

——日頃の生活は？

サラリーマンとして勤めております。四時起床、七時半まで描いて、八時入社〜十八時帰宅、食事、入浴して0時まで描くといったカタチです。

.....

この数年で急に多くのオフアアがくるようになって、東京青山「新生堂」での個展を終えたばかりなのに、まだ今年二回の個展がひかえているとか！ 思わず体大丈夫？ と問いたくなる多忙な新進画家です。

重厚さうまい。ロープの位置。
中村裕二 テンペラが合っている。構図とモチーフが大事。**海部洋** それぞれの質感がうまい。色にも意識を深めると。**田中敏雄** リズムミカルな構図。手足の動きに音楽を感じる。**市原はるか** モチーフへの愛情が良い。右下部分の処理。**戸苅武宏** 全体の色調の上品さ。大きな物の大きな変化にも。**渡邊道男** 描写力ある。人物に興味づけし過ぎなくても。**広瀬範** 色のまとまりがきれい。横の線のとらえ直しを。**宮島百合子** 空間の扱いがうまい。構造物の線のデッサンを。**鳥居佳子** 面の色の美しさ。濃い色の深みをもう一段。**樋谷邦夫** テーマの明確さ。地面への意識をもう少し。**山口繁雄** 水面の巧みさ。堤防の位置が苦しいか。**新井隆** 新たなモチーフへの取り組み。白の深みを。**近藤孝子** 勢いある描写。周りがまだ説明的。**森敬介** 強い構図に現場の雰囲気良く出ている。暗色の処理。**浜崎千尋** 構成頑張っている。人物の色をさらに消化。**遠藤博政** 一面の色と線の美しさ。情感のある現場感が巧い。**畠山正枝** 良い画面感。シャツの浮遊感がほしい。



マンドリンのある静物 小沼 秀夫



YC-1 山下 審也



浜 菅沼 正則



川原の道 青木 年広



光のスケッチ 西 真里子



「トリコロール」 久保 博孝



「月と六ペンス」 中村 裕二



シャツ 畠山 正枝



after time-'16 中島 和長

今年38回展を迎える 神奈川一水会作家展

神奈川県在住作家による
展覧会です。関東圏では最
も長く続いている本展は、昭
和五十四年（一九七九）、「神
奈川一水会会員展」として

始まりました。広瀬功、中
谷龍一（以下敬称略）らの熱
意により当時の委員、会員
に呼びかけ30号程度の作品
を展示しました。

第1回展には安宅庸雄、
有島生馬、木下孝則、小山
敬三、中村琢二ら当時の運
営委員や、越後島進、北村
巖、小林哲夫の名前が見ら
れます。

この会員展は平成元年（一
九八九）第11回展まで続き
ましたが、同年、一水会の
大改革で、会員は会友にな
るなどして会の名称と一致
しなくなり、一旦解散いた
しました。

翌平成二年（一九九〇）、
神奈川展の存続を願う有志
をもつて「神奈川一水会作家
展」と名称を変更し、20回
展まで続けました。

平成二十二年（二〇一〇）

には会員展時代の11回を加
算して、第32回神奈川一水
会作家展と改訂し、現在に
至っております。

今年五月三十一日〜六
月五日、第38回展を迎えま
す。この三月に逝去された
寺井重三代表の後を継いだ
一の瀬洋、吉野谷幸重、吉
崎道治、小泉元生、丹羽
章、斉藤蕙子、池田清明、
宮原麗子、鍵主恭夫、藤浪
成喜、宇佐美明美、菊地洋
二ら、総勢五〇人ほどで一
人一点の展示を予定してい
ます。

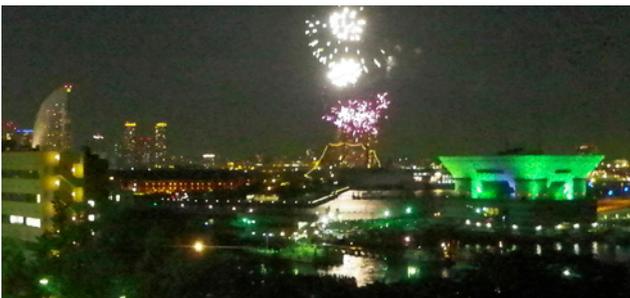
発足以来、県の東部かつ
沿岸部の出品者が多く、そ
の関係もあつて、第34回展
まで、横浜市、関内駅前の
旧「横浜市民ギャラリー」を
展覧会場としていました。

会場老朽化での立て直しに
伴い、35、36回展は川崎駅
前「アートガーデンかわさ
き」に移り、そして昨年の37
回展より山下公園前の「神
奈川県民ホールギャラリー」
で開催しております。

で開催しております。



懇親会場から望む横浜港、大横橋



昨年の懇親会では横浜開港祭の花火が見えました



昨年懇親会での寺井代表挨拶



横浜市民ギャラリー使用当時の展示会場

一水会の創立者のうち、
有島生馬（鎌倉）、木下孝
則（横浜）、小山敬三（茅ヶ
崎）、安井曾太郎（湯河原）
の先生方が、神奈川に居を
定めたことは、一水会の作
風と神奈川の開明的風土と
の関連を物語っています。

各人の創意を尊重する神
奈川一水会作家展、自由闊
達な気風は発足以来変わる
ことはありません。

（加曾利光男記）



郊外 1952年 F30 第38回光風会展

入門講座からやって皆さんよく付いて来てくれました。

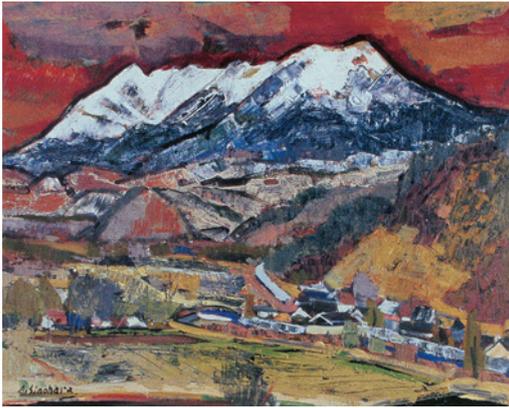
今、棚田っていうのはほとんど無いらんだよね。あつても草ぼうぼうになつて見向きもしないっていう時代になつてきた。四角な田圃になると切り餅みたいで面白くない。やっぱり祖先が地形に合わせて田圃を造つたその美しき、棚田は十四、五年描いた。小さい絵も含めるとほんとに毎日描きました。消えていくものに対する懐かしき、そういうものが描かせたと思います。根気よく描いておいて良かったと痛切に思います。無くなつてからはもう駄目なんですね。その棚田が全部民家になつちやうたんだよね。失われて行く棚田、なんとか残したいなつていう気持ちあります。真っ黒い土の棚田、黒土の香りっていうのは良いですよ。田圃で蛙があがア鳴き出すとどうしても絵が描きたくなくなる。

《里山へ》

山と山村っていうことでテーマを決めて勉強を始めたんですが、恐ろしく難しい。名山じゃない、生活に密着した山っていうようなことで選んだ主題は「里山」なんです。どちらを向いても里山はある。そこへ眼を向けたのが田崎先生に認められた第一歩、他人のやつてないことをやる。これ朝倉山つて言つて高さ百メートルもないんじゃないかな。子供の頃よく遊んだ山ですから描いてやろうと思つて。描いたら日展で特選頂いて。あれ？何でだろうつて考えたら、誰もがやらない山を描いたから良かったんじゃないかな。

「どうして八ヶ岳や富士山描かないの」つて言われるんです。嫌いということじゃなくて、富士山とぼくでは格が違うんだよ。富士山描けるような絵描きにはまだなつていないと。

感謝！ こういう大地の起伏のあるところに生まれた有り難さつていうの



御岳 1994年 F30 長野県信濃美術館蔵

『里山三月』 冬の木崎湖(長野県大町市)つていうのが非常に面白い、早春の。雑木林の下に雪が積もつて妙な色をしている、そういうところの面白さを狙つたものですね。湖は全部雪が融けてるんですけども、里山だけは非常に深く積もつていて面白い表情をしている。僕にとっては代表的な一つの仕事だと思つて。

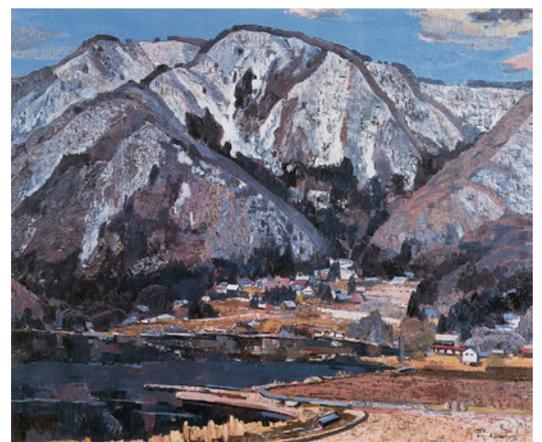
『西野川河岸段丘』 御岳を描きに友達と行ったんです。開田高原へ。見晴らし台のところから里山が見え、左下に川が流れて。雑木山に雪が積もつてる面白さつていうのを僕は初めて発見した。130号の大きさがあるんですが、田崎先生に褒められました。季節の変わり目、晩秋、早春、それが絵になるんだねえ。

『いま思うこと』

をまず感じますね。自然の中、それから諏訪の人間、人間性つていうかな。働いている人。すべてを含めて有り難かつたなあと思つて。自由に描けて幸せだつたなあと思つて。描いた当時下手くそな絵を描いたなあと思つたが、こうやって並べるとこれで良かったんだつていう想いがひとつ。えらく褒められた絵が一ヶ月ちよつと観ていると、ああこれは駄目だつて。並べておいて残る絵と残らない絵がありますね、それを痛切に感じます。その残るつていう絵のありかたをこの展覧会でじっくりと自分なりに観て、来年、再来年の仕事の基盤にしていきたいと思つていますね。どうにもならない絵が案外良く見える、失敗した絵つていうのが大事ですね。スケッチつていうのは、制作をするための基本の勉強、鉛筆だけでやる場合も絵の具を使う場合もある。部



西野川河岸段丘 2001年 F130 第33回日展



里山三月 1996年 F130 第28回日展 茅野市美術館蔵

分的に面白いからスケッチしておこうというのがあります。それが非常に大事なんです、今の若い人たちは忙しくて出来ないのかなあ。感動を得たときにデッサン、スケッチで何枚も何枚も色々な角度で捉えておく、それが大事。こういう大作でも描き出したら一気にどんどんやつちやうのは、デッサンがあるから。分らなくなつたらそれを見ればいい。

「写真を撮つたらいいじゃないか」つて。これ僕は大反対！ 写真で絵を描くなんてとんでもない話だ！ デッサンで、下手くそでもそこから出発しなさい。それは六十何年描いてきた結論だな、「写真は駄目!!」。

年を追つてどういふ風に変わつていくか。それを観ると僕の心境が分かるんじゃないかなと思つて。

取材日/二〇一五年八月二十七日 (新井隆記)

あのころから

浅見嘉正先生訪問インタビュー

聞き手／新井・さきや・西



たようなことが何回かありました。その方が昭和十九年に応召し出征するときに、写生用の大型イーゼルと板に描いた絵を一点うちにくれて……。それで入隊しまして半年くらいで戦死しました。

—その後先生はそのイーゼルでスケッチを。

120号のキャンバスが使えるようなイーゼル。ずうっと使って今も二階に大事にしまっておる。

—浅見先生はその後埼玉師範学校（現・埼玉大学教育学部）に入られる。

昭和十七年から約六年間埼玉師範に行きました。学校の教員というのは憧れの的であつたと思います。

—やはり洋画をやりたいって選んだコースでもあるわけですか？

ええ、絵の先生になりたいという希望で、小学校の先生に勧められてそちらへ行く気持ちになりました。

—一水会展には？

出品については秩父の先輩で斎藤政一さん。ほとんど秩父での絵の活動を、主に二人でやっておった関係で「浅見、俺は一水会だけだあんたどうだ、出してみないか？」って言われて、じゃあ出品するというような形で。昭和二十六年に入選し、その時

の作品が『山村』というのを覚えております。

—翌年には日展に『秩父の農家』という絵で入選。二十五歳、早熟ですね、高田誠先生にはその後出会われたのですか？

秩父の写真家で清水武甲さんという方が高田先生とよく知り合っていた関係で、清水さんの紹介状を持って弟子入りに行ったのを覚えております。

—高田先生とはどのようなお話を？

先生は淡々としておりまして、絵の話はほとんどしないで、ただ秩父の気候のことあるいはお祭りのことなど訊かれたのを覚えておりますが、先生は特別、家で指導ということほとんど無かつたようです。二、三年行つてから「浅見君、良くものを観てしっかりと描くんだね」と。そのあと先生は何も言わなかつたですね。自分じゃ精一杯描いていながら、先生の気持ちから言うと、全然まだだなと。

そこから毎年一回持つて行きましたが「うーん……」。先生の家はいろんな人が画鋏で貼つて吊すわけですから鴨居が穴だらけなんです。他を修理してもその穴だけはそのまま現在でもあるようですが。それで年に一回、鴨居のところに張り付けてうちは後ろに正座して、先生はすーっと見まして一言「まあ、いいでしょう」。それが八年から一〇年くらい続いてやっと思つた。良くものを観て描くっていうのは、ただ見てではなくて、そのものに対するひとつの形、色、立体感、それから生まれてくる画面の構成まで高めてしっかりと描くという意味だと、やっと思が付いたんですね。で、それから夢中で描いた。それが六、七年くらい続きましたね。

—その間ずっと工場を描かれていますね、これは秩父ですか？

あちこち写生して感じましたのが、信州の出品者の風景と比べて勝負にならないと思つたの。秩父で描けるものは何か？そこにセメント工場がある。それが発端であつたと思います。

—現場で描くのですか、120号を。

先ほどのイーゼルのロープで右肩から、それからスケッチ箱を左肩から。それで120号をロープでよく縛り付けて。秩父セメントの工場は総務部長

—昨年の秩父神社での個展、素晴らしいですね。秩父の杜とは？

神社の森を言ってますね。—展覧会を毎年開いているんですね。『ははそのもり美術展』という。

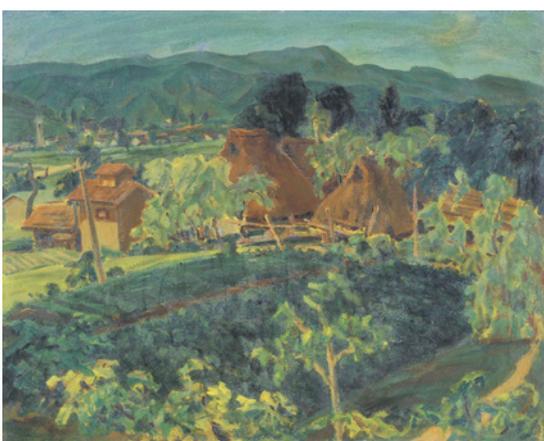
昭和四十八年頃台風で秩父神社の境内の大きな銀杏の木が倒れて本殿はメチャメチャになつたんですね。したら前の宮司さんが、神社が代表して台風を受けて立ち、一般の市民には台風の被害はなかつたはずだつて言ってますね。再建の時に社務所が

思い切つて浄財を集めて、今のよう大きな建物にしたわけです。平成二階は市民に開放しております。宮司さんも中学の頃絵が非常に巧い生徒でした。

—先生の教え子でしたか。

ええ、生徒でありました。—浅見先生はやはり小さい頃から絵が得意でしたか？

うちは小さい時から非常に絵は好きでしたね。近くに絵の好きな方がいて、彼が写生に行く時について行つ



秩父の農家 30F 1952年



工場盛夏 100P 1959年

の方知っておりましたから、面会をお願いしてわけを説明して「まあそうかい。うんと描いてくれ」というので、セメントのマークのバツヂを一個くれましてね、いつでもいいから写生の時にはこれを付けてお入りなさいと。それで写生を一〇年近くしましたですからね。家出るのが朝の九時ころ。道具を全部背負って山を登って行く。

なんて言われて、よく飲んだの覚えてますね。あの頃の私の写生は120号一点、100号は四、五点、80号は一〇点ほど全部現場で描いた。この頃、画面の構築とか絵の具の塗り方など探っておられる。太い線でぎゅっ、ぎゅっ。

何か変わったことをして描けないかということを考えて、今度は工場の中へ入って、邪魔にならない場所を描くことを始めました。一番最初に貨車から石灰岩をうまける場所、危ないですけど、非常に魅力のある

—かなり日数もかかるんでしょうね。ええ、何回も。全部炎天の中で描いてました、暑いです。セメント工場の心臓部と言われるのが「焼成」という場所で、従業員は熱いものですから入ってすぐに出て、大きい氷がぶつこんであるバケツの水を飲んじやまた行くんですね。うちも炎天の中で写生して居るものだから「絵描きのあんちゃん、こんな暑い中で毒だから、遠慮なくどんどん飲んで描きなよ！」

場所です。その軒下に陣取って描いたのは、パレットナイフで全部描いたような感じがしますね。「この調子で描いて行った方が、今描いている絵と世界が違って良かったんじゃないか」ってそういうことを言う人もいましたね。—一九七九年、『粘土山と工場』で日展特選、高田先生から褒めて頂いた。先生が褒めてくれた絵が二点ありましてね、一点はこの時。「これは構図がいいなあ」って初めて褒められた

ね。「額縁入れるとこの線が隠れるからこれは指二本ばかり下げて描くといよいよ」とそれだけ先生言ってくれて。秩父のセメントといいますと全部灰色調なんです。もう少し色が欲しいと思っましてね、こう考えたところにインドのサリーを思い出しました。インドでは一般の人たちの住む生活の中にもそういう色んな原色のサリーが、土に汚れて良い雰囲気の人たちがいるのかなあということを考えて、じゃ思い切っ行ってみようじゃないかって。まだそのころ外務省は海外旅行を自由に許可しなかつたので、電話一本ではじかれちゃつてね。それである人が「仏教芸術の研究」っていうのどうだつて。そうしたらすぐ通つたんですよ。—そこで「人」を描かれていますね暮らしとかを。

インドのこういう風物ですと人物を描かざるを得ない。何点描いたか、夢中になってほとんどパステルで描いて、それとカメラで撮ったりして描いた気がします。この人物などは実物もないので、しょうがないからうちの倅を小屋のところに立たせて、手足を写生して描いたんですよ。彼は背が高く足も太くないからちやうど間に合つたんですよ。—他の少女たちはたまたまそこにいる人に頼んで？

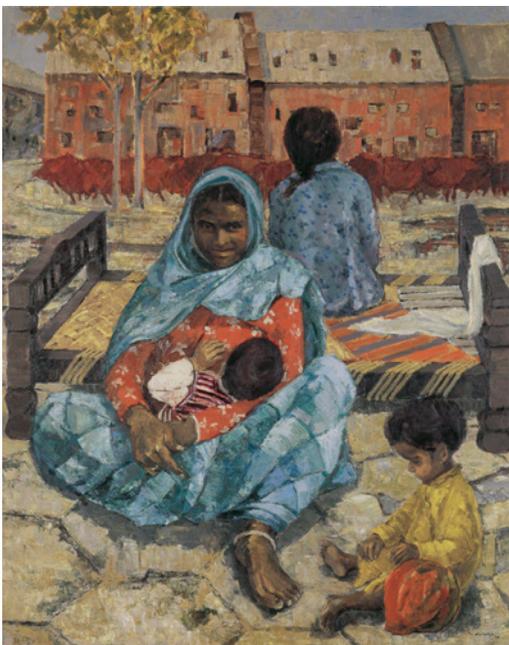
ええ、向こうの言葉出来ないから、ちよつとこへこつてこつて…なんて

いうと座つてくれました。描いてから駄賃としてお金を紙に包んでやったのを覚えております。—のちの労働者を描く構図がすでに出来上がってますね。画面の中心に二人据えてその奥に地平線がうんと高い位置で描かれています。

インドの人たちを描いてると段々と資料が無くなつていくんですね。それでこれに変わるものはないかというので考えついたのが、労働者。秩父市に『T工業石灰』という会社がありましてね、その工場の人たちを描いたんですよ。小さい工場ですから働く人は十五、六人。でもモデルとして描きたい人は三、四人しかいない。その方ばかり描いて他の人たちは無視するのじゃ怒られますから、どの人にも同じようにやらないとまずいと思っましてね。昼休みにむすび食い終わると、疲れて昼寝をするとかテレビを見るとか新聞見るとか色んなことをする、そこがスケッチする時間ですね。休憩時間を狙つてやるということになりましたね。行くときには必ず酒二本を買ってリュックに背負い、一番最初に

事務所へ行って「何かの時に一杯やつて下さい」なんて。そのうち「先生どうだい、もう一杯お茶を」なんて。茶碗に自分の口を付けたところだけ白くなつて残るんですよ。それでもね、旨いって調子で飲んで、そうしたら「先生どうだいもう一杯お茶を」なんて。学校の教員の時もの生徒に対しても平等にやつていましたから、大人の人たちも同じですね。

—秩父神社での個展に小さなヌードの絵がありましたけれども…ええ、地元でヌードの写生会は続いております、もう四〇年近く。それから自分たちの弟子の『つちくれ』の連中が年に二回モデル呼んでます。—『つちくれ』というのは浅見先生のお弟子さんたちの教室ですか？年二、三回集まって合評会ですね、中央展に出したいという場合にはそういう研究会を持つてやるという



ラ・ヒサの家族 100F 1968年 会員佳作賞



形になっております。

―秩父は美術が盛んですね。

秩父市で前の市長さんが年間三〇〇万円の予算を、地元の若い人に少しでも張り合いをつけてさせたいという気持ちでね。全部で五十一、二人くらいの作品を買い上げました。それからもう一つ『秩父美術懇話会』というのがありますね、絵と書と写真。中央、または地元でも特選また

は入賞した人たちを紹介するというので、『懇話会展』というのやつて。

―浅見先生は『秩父美術家協会』を有志で創立されました。

昭和二十三年から秩父美術連盟というのがありましてね、戦後の秩父の人たちを集めて、先輩たちに協力したのが初めです。昭和三十七年、写真と絵が分かれて、片方は秩父写真会、うちの方は秩父美術家協会と

いう形で、創立会員八人でこの会を始めて去年で五〇周年。現在も続いております。

―若い先生はあちこち回されますが先生はずっと秩父におられます。

一中へ十六年、二中へ十六年居たんです。秩父の埼玉県小中学校美術教育連盟支部長を十三年、橋本長治さんと二人が主になって非常に献身的によく協力したと思います。そういう風な活動で協力してやるものから、辺鄙な所へ回されなかつたですね。主になる収入は教員ですから、その根本を忘れては申し訳ないと、腹はそこにありましたねえ。

―絵の話に戻りますが、特に印象深い『冬の汗』。汗に着目された。たまにまこういう場面に出会われたのでしょうか？

労働者を描いているうちに正面も非常に印象深いですけども、休む時など背中を見ますとほとんどの人が汗びっしょりですね、それを拭こうともしないしほつとしたような気持ちでもって休む。そこに何か愛着を覚えまして。働く人の土と汗のおいというんですか、働く人たちの勢いを感じるような背中、汗かく大きな体が家庭を支える。こういうことを考えますとやはり後ろ姿を描いて行くことが大事じゃないかと。それで描きたい労働者は何度でも描きました。

―絵を見ると、大地と働いている人

たちとのつながりのようなものを強く意識されて描かれたことがわかります。

土と労働者とのつながりということ、その辺はそんなに詳しくつづかないんだけど、背景の分量が多くなりましたねえ。

―『冬の汗』は、先生ご自身が六〇代に入られる頃の作品ですけども、ご自分の人生とか暮らしを重ね合わせられて？

自分もその年齢になってきますと、同じ年代とかそういう風な仕事を持つ人にも興味を無意識的に持つようになっていたのか、どうかねえ…。そういうところまで実は考えなかつたかもしれないですね。自然に。

―働く人の姿を見て様々な繋がりをその人を通じてお感じになり、それを描かれている。高田先生にお若い時期に仰って頂いた「ものを観て描きなさい」ということの意味なのかもしれませんね。

ええ、ええ。高田先生が言ったことは誰でもみんな、「はい分かりました」と言っけれども本当に分かったのなら絵で表さなければならぬと。それが理解したつていうことじゃないかというのがある年齢に近づいて来てから分かるような気がしましたですね。

―段々風景に重点が置かれるようになって、重層的な景色が選ば

れています。初期のはどちらかという人が主という感じですね。

ええ、ほとんどこのころになりますと陶土が主になっておると思います。―こういう現場というのは人間が労働の結果作って行く風景ですよ、画題に「回想」という言葉もあります。

背景になるものが、主体になるもの（人物）をより高めていくことにやや気が向いて来たような、そのくらいにしか感じませんけれどもね。

―人と景色との関係が密接になってきた感じがします。労働の姿、様子がバックに表れてくる。ものをよく観ることによって関連付けが出来上がり深まっていく。

そこまで意識して描いたかどうかわかりませんが、そのようなものを幾つか見ますと、人物を生かす背景、それと背景の上に立つ人物この両



冬の汗 100F 1987年

方がいわば助け合いながら一つの絵を作り上げていくというのは、自然になつたのかも知れません。

—最近は何体山、秩父の山そのものを描かれてますけれども。

ある先生が「浅見君、風景ばかりあなただけ描くけれども、人物も描かないと風景は上手くならないよ」と。そう言ったのが中村善策さん。秩父には一水会の先生方よくみえたんですね。

色んな先生を秩父へ招待するということを感じて盛んにやっていた時代がありましたね。そういうときにうちあたりの若造は動員されるわけですよ。出ないわけにいかないですよ。旅館に行きますと善策先生、居るんですね。「お前だれだあ」なんて言っていて「はい、浅見です」と、「ん？浅見？聞いたことのある奴だなあ」とこう言うんですね。

善策先生色紙を出して真ん中に筆をぶつけてちよちよとしてその次に墨で「いまし」と書いたんですね。そこにここに「昇る」。「若い、お前分かるか」って「先生、分かりません」「うーん、しょうがないな、この程度が分かるんなくちゃ駄目だなあ」と。「いいか、今し日昇るだ。あなた、今し日が昇るからがんばれな」とこう言うんですね。そして「善策」と。それでその色紙は引き出しの中にいれてあります。昔の先生っていうのは何かこう、風格もあるしズバリズバリ遠慮なく言う先生が多かったですね。金子博信

先生はうちの労働者の人物を「この袖のこの辺がおかしい」と。中村琢二先生が「こんな程度の肘描いていちゃ駄目だ」というようなことを言ったらいいんですね。そして「さばで聞いて金子先生が手紙でそういうことを書いてうちにくれた。どんな展覧会でも一水会の出品者だと判ると自分の弟子でなくとも、感じたことは遠慮なく言って頂ける。有り難いと思います。」

—武甲山はずっと描かれてますね。幼少の頃からご覧になっている山、その形自体がまるで変わって来たと思えますけど。

随分変わりましたですね。うちは農家の倅で小さい頃を思い出しても、農家の方が武甲山の雲の懸かり方を見て作業の基準にしていたような感じがしますね。日照りが続きますと雨乞いというので蓑、すげ傘がぶつて草鞋履きで一升瓶二、三本ひつるって登った。武甲山は信仰の対象の山であります。秩父の人たち全部武甲山に対する愛着、愛情を持っていたような気がします。緑豊かで周りの民家とか住民を見守ってくれたような印象を小さい時から受けておりますね。絵にするのはやはり晩秋から冬にかけて。特に武甲山の岩肌が雪で白くなった場所、雪が降り被さらないで、いわば山の骨格がはつきりと眼に映し出される。その頃になると山麓の杉林の雪も上手く配置して徐々

に登っていく。こういうような情景の時が一番意欲をそえられる。山は四季折々の様子をしており、小さい頃からの敬愛の気持ちは、今も続いておると思います。高田先生のことにお話を戻しますと、埼玉新聞が三〇周年と四〇周年のときに、埼玉の作家たちに県内の風景を描いてもらう行事がありまして、高田先生は武甲山出しましたね。同じ場所で一〇年毎に二回描かれた。その時に、「前回はこの山の向こうに何も見えなかったけれども、四〇周年で来たときに後ろの山がはつきり見えるんだね。武甲山という山は石灰岩のゆえに悲しい運命の山だなあ」という一言ですが印象に残っておりますね。

—浅見先生はそれでも武甲山を描き続ける。

今の武甲山で描きたいとは思わないですね、描くのでしたら水彩で。あれだけ山が変わっちゃっているのでも。

—先生が出品されて六十五年。昨今の「一水会の様子をご覧になって、浅見先生の思い、感想をお聞かせください。

創立当時の先生、それに近い偉い先生方には骨太といえますが、その作家の尊厳、存在の気迫を非常に強く感じました。創立から第二陣、三陣になって来て、昔の作家それぞれが非常に立派で存在価値が大きかったということを感じますねえ。私の絵ですが、一水会13回展、それからずうっとおかげさまで一度も落選したことがなく、ここまでやって来ましたね。昔はとにかく、出品するからには入選したいとただそれ一つで。賞なんていうことは全然考えず精一杯描いて出すだけでしたね。またちよつと高田先生のこと思い出しますが、先生の場合、自分の言ったことが画面に表れて、これはいいなあと思うとその人を認めますけど、それが出て来るまでは絶対に挙げるというようなことはしない方がいいかと思って思いましたね。本人が自覚して仕事に夢中になって、その結果が出るまで先生はじつと見ているような気がす

る。無理矢理にはしない。うちの言い方がいいのかどうかこれは分かりませんが、せんげね。

—一水会は他の団体と比べると比較的、創立の時の精神を大事にしてきた。時代に合せて変わっていかないとしなかつた会だと思っております。ええ、やはり一水会の主旨と申しますのは西洋絵画の写実を本道とするというのが大きな題目ですから創立の精神はちゃんとわきまえていなければならぬ。それは確かにそうなんですけれども、ただそれだけでずうっと進めて良いものかどうかということについては少し疑問を持つのも事実ですね。一水会をより発展させるためには表現の多様性ということも

る。無理矢理にはしない。うちの言い方がいいのかどうかこれは分かりませんが、せんげね。



ありますわねえ。人間の顔がそれぞれ違うように各自が自分のあり方といますか、感性、個性、そういうものを活かした仕事を見つめて進めて行くということが大事じゃないかと思いますがね。歩みはのろくても自分に対して正直な仕事をして行かれた方がいいんじゃないかと今思っております。

—息子「浅見文紀先生の仕事について何か。」

親父と似たような絵を描かないのが私としては良かったなと、こういうふうな感じがしておりますがね。親は親、倅は倅で違うものを描いていることが、私としては一番ほっとするところですね。私と似たような絵を描いてというのは、やはり親としますと苦痛であったかもしれませんね。

—ひとの模倣をしても仕方がないというメッセージですね。自分の一番描きたいものを自分なりのスタイルで描く。

はい、そこが一番。

—具象絵画、写実的な表現という狭い土俵でみなさん制作を考えているわけですが、それでも色の使い方や絵の具の載せ方、モチーフもそれぞれでヴァリエーションがありますね。

やはり写実に徹底して行く、できるだけ従来にない新しい色彩に

気持ちを持つていく、より写実的でも象的なものを追求して行く。まだ他にもあるかもしれないけれど、作家の感性を活かしながら頑張つて頂くといいことが今、どの方にも大事なことでないかという気が致します。良く観て自分の感性を活かしながら制作に励む。まあそう言ってもうちも長年ろくな見方しないで今まで来て、こまでもここから先できないかもしれない。

—まだまだ浅見先生に活躍して頂かないと。まさに「写実」の作品群ですから。先生のこれからの抱負、考え、制作について伺います。

もうちょっと頑張つて描きたい、それだけです。一〇メートルのキャンバスを買つてですね、120号ずつハサミで切つて、三点ばかりは巻いてあるんですがね、まずそれだけは頑張りたいという気持ちです。そこから先はわからないですねえ…。

—すごい意欲ですね。この快適なアトリエの中でお話を伺えて大変有り難かったです。

いやあ、こういう暑い時期にわざわざ山の中まで入つて来て頂いて恐縮致します。

以上「あのころこれから」二〇一五年七月三十一日 埼玉県秩父市熊木町 浅見嘉正先生アトリエにて



の住んでいる南区は山あり川あり自然一杯のところ。少し足を延ばすと札幌の奥座敷と言われる定山溪、支笏湖沿線のラルマナイ川と私のモチーフになるところが一杯あります。加えて絵を描くことのできる環境と時間を持つておくことに感謝しつつ描き続けて行こうと考えております。

「川と私」

北海道・安達久美子

北海道の公募展である「道展」が創立九〇年を迎えました。私はそこに籍を置いて十六年になります。初入選の頃は川辺の風景を描いておりました。川は無限であり止め処なく流れ、その表情は尽きる事の無い魅力です。川面に差し込む光、それと戯れる水の流れ、清穏な岩肌、透明な川床…いつの頃からかその川床の魅力に惹かれ、これを真正面からとらえ、その感動を如何にキャンバスに表現するかが私の主題となりました。一水会のお世話になってからこの思いはより一層強いものとなりました。札幌は二百万都市といつても、私

「追悼 寺井重三先生」

神奈川・本多和矩

寺井重三先生が急逝されました。三月二日の選抜展には二点出品され、亡くなる一ヶ月前には教室の生徒一人一人にご指導されており、あまりの急なことに茫然とするばかりでした。先生との出会いは、遠く五〇数年前、会社の絵画部の一室でした。まだ絵を始めたばかりの頃、伊豆安良里港の絵を見て頂いた時、船の屋根にエメラルド・グリーン鮮やかな一筆、とたんに絵が変わった事が今も脳裏に残っています。先生からは絵ばかりではありません。人へのやさしさ、謙虚さ、そして

「新たな挑戦」

広島・島山正枝

今日、一水会精鋭展の作品を送った。去年のこの頃私は何をしていたのだろう。こんなに絵に打ち込むこともなく日々を無駄に過ごしていた気がする。私は長くデッサン会に通っている。そこへ一水会の方々が入会された。皆さんテーマを決めて毎年東京に出品されている。その一人の方から入会を勧められた。東京で自分の作品を見るのが夢の私。よし描こう！新たな挑戦だ。東京都美術館での一水会展の会場。一歩足を踏み入れると張りつめた空気。しっかりと描きこんである作品、写実絵画が多く、いろいろな捉え方をされていて圧倒された。こんな世界があるのだ。私の作品はまだ未熟で勉強不足だと思知らされた。あれから早半年たち、作品を描き終えた。迷い悩み描き続けた作品。一

吉崎道治のつよつよと海舟 ④

長野県 遠山郷下粟

中央高速、飯田から南アルプス

方面へ約一時間半、天空の里(又は日本のチロル、日本のチベット)

遠山郷は聖岳を望む急斜面の集落、冬から春の写生地。二軒の

民宿と分校を改築したロッジがあり、最近は暮の夜神楽が有名

になり訪れる人も多くなった。親しくなったロッジの奥様は、結

婚した頃、何度も裏口に下駄を揃え逃げ出す準備をしていたそ

うな。山を三つばかり越え人里へ行くので断念、今は面倒見の

良い女将様で落ち着いている。

長野県 農村歌舞伎の里 大鹿村

中央道松川から小一時間南アルプスの登山口・山塩と大鹿歌

舞伎で有名。温泉宿の赤石荘近く、夕立神へ行けば赤石岳が目

の前、西には中央アルプスが聳える。紅葉の時は絶景だ。露天

風呂につかつて二日の行程を決める。赤石荘のご主人は赤塗りの

悪人が得意らしいがハンサム。欠点はトイレで尻を拭く時鼻が

壁にすれること位か!

料理はなかなかだ。

長野県 中綱湖

木崎・青木と合わせて仁科三

湖のひとつ。松本乗換え大糸線の駅前であり、ヘラ釣りでも有

名。かつては高田誠先生も写生されている。水の色が良く四季

描けるし、私も何回か100号を現場で写生した所。宿の女将

は料理下手で客の私が運転して寿司屋や温泉に誘われたが、吹

雪の写生から戻ると「しるこ」を作らせて待つてくれたお人好

しだった。雪の中でも手袋をはかない私を知っていて、高名な

日本画家が部屋から描かせてくれと頼まれたのを断ったとか。

関西で時々顔を合わせるので具合が悪かった。木崎湖は中村善

作先生、青木湖は高田誠先生の古戦場だ。

千葉県 露地栽培の花

南房総は白間津だが、より千倉寄りの千田・大川辺が描け

る。気風の良い海女さんに頼んでおくち長持ちする花が買える。

水会のお蔭で私はこうして絵と本気で向き合えた。その充実感。今、一水会の方々に感謝している。これからも目標を持ち、人生を楽しみながら絵も真剣に楽しんでいきたいと思

「新潟は佐渡のイマキです!」

新潟・金城俊雄

一水会懇親会壇上で言った言葉でしたが、出品も二〇年以上が過ぎて、改めて過ぎ去った時の早さに感

わされている昨今です。毎年一水会の先生方をはじめ皆様方の刺激や影

響、時には意見や指摘を受けながら作家生活が出来た事を感謝申し上げます。

近年の私の作品ですが、自宅近辺に有る閉鉢山の跡地として、山、

川、海に点在する、朽ちつつある鉢山遺跡に魅力を感じ、親近感を覚え

取り組んでおります。見慣れた遺跡群を問題視しながら試行錯誤で制作

に励んでいます。これからも一水会展をはじめ精鋭展を通して勉強して

行きたいと思えます。今後とも御指導の程よろしくお願い致します。

「愛しき絵よ!」

奈良・久保直樹

100号を始めた頃、構図、色の

選択は正しいか等ということばかり気になり、自分の制作意図など見直す余裕もなく、搬入に至ってしま

た。二年前、変電所の鉄塔の重なり

の妙に惹かれ取り組んでいる時、この鉄塔や電線をもっと格好良いもの

にと愛しきが出始め、思いのままに描き続けていくと、さらに色や形が

湧いてきて、絵が踊り始めました。益々、自分の絵が好きになつていき

ました。深い思いを抱き続け、色を重ねて全体の着色を終えた時、目

前には実際の景観とは少しかけ離れていましたが、チャーミングな絵が

ありました。私は恋人を見つめる目でその絵を見ていました。自分の絵に自分で感

動していました。「絵を描くということとは、自分の絵が好きになること、

自分の絵に全身で愛を注いでいくことなんだ」と。

「制作エトセラ」

東京・滝沢美恵子

制作にあたり私の目指すところは写意です。ある時、「今の自分を描いて欲しい」との話がありました。取材して不確かな今を生きている彼女の想いを知り、アトリエに入ったものの、なかなか取り掛かれないのでしたのですが、取材した三日後に入院



西 真里子 画

一水会事務局だより

第2回人物デッサン講座を開催します。

昨年の第1回人物デッサン講座が大変好評で、継続を望む声が多数でしたので、今年度も開講することになりました。会場の関係で募集人数は限られますが、積極的な参加を募ります。

●日時／六月四日(土)・五日(日)各九時～十六時

●場所／旧川口市立芝園中学校 川口市芝園町三十八 JR京浜東北線蕨駅下車 西口から一六〇〇m(徒歩十五分)

●講師(予定)／小川游先生、寺井力三郎先、山名将夫先生、玉虫良次先生
●募集／先着二十名
●受付期間／五月十六日～二十八日

●申込先／一水会事務局 山本宛 FAX〇四八・八二六・八八〇五にてお申し込みください。
●持参／木炭デッサン用具一式

公募団体ベストセレクション美術2016

●日程／五月四日(水)～二十七日(金)

●休館日五月十六日(月)
●会場／東京都美術館
●入場料／千円

一水会からは田島健次氏、山名将夫氏、保坂晶氏、伊藤尚尋氏が出品。

最近の動静

【逝去】寺井重三氏(運営委員)、林登美氏(会員)、山岸用之介氏(会員)、大越松司氏(会友)

日本橋三越での第55回選抜展が終了した翌日、運営委員の寺井重三先生の突然の訃報に接し、たいへんに驚いております。

能登のご出身で、日本画から洋画に転じられたと伺っております。踊り子や花の作品が得意で、軽妙で的確な筆遣い、その華やかな表現が印象に残ります。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

【お知らせ】

作品館のオープンに合わせて求龍堂から画集『清冽な詩情・小川游 画業60年の軌跡』が刊行されました。購入希望者は本部事務局宛てにFAXでお申し込み下さい。

画集『清冽な詩情・小川游 画業60年の軌跡』求龍堂刊
●定価／五千円＋税
●申込先／〇四八・八二六・八八〇五 山本耕造方

第78回 一水会展

東京都美術館

9月18日(日)～10月2日(日)

※休館日 9月20日(火)

授賞式・懇親会/9月22日(木)

ギャラリー・トーク/9月24日(土)・25日(日)

大阪展

11月8日(火)～13日(日) 大阪市立美術館

名古屋展

12月6日(火)～11日(日) 愛知県美術館ギャラリーA～G

金沢展

12月14日(水)～18日(日) 金沢21世紀美術館

芥子園研究会(大作の研究会)のお知らせ

本年度大作の研究会を左記のとおり実施します。どなたでも参加いただけます。会場へ作品持参のうえお集まりください。

●日程／第1回 七月三日(日)・第2回 九月二十三日(金)

●会場／日展新会館

〒一〇〇・〇〇〇二 東京都台東区上野桜木二・十四・三

☎〇三・五八〇九・〇八〇三

●アクセス／JR日暮里駅南口より徒歩八分

●搬入出／各自で手配のこと。

●日美が便利です。☎〇三・三八二二・三八五四

●参加費／各回五千円 ※出欠席の連絡の必要はありません。

●お問合せ／田辺知治 ☎〇四三・四九六・一〇七〇

栗原高光 ☎〇四五・八六一・四四三六

武藤初雄(関西地区の方) ☎〇七二・三三五・四〇〇八

編集後記

冬号に掲載するための座談会が開かれました。絵を描きかけも、取り組み方も、年代も違う色々な経歴の方が集まったフリーマーケット。それぞれの生活の中から生まれた感覚、感性が存分に現れて、充実した2時間でした。次号も乞うご期待。 N・M

かつて「冬の時代」とも評された本会だが、私は入会以来一度も「冬」を感じたことがない。本紙の編集に携わることで更にその気持ち強めている。広報部に寄せられる言葉、取材に伺い賜るお言葉、そのひとつひとつに強い想いが籠められており、熱い。先達の情熱、精神が継承されていることを肌で感じる。会史はやがて80年、本会、すなわち皆さんそれぞれの「今」を伝えて行きたい。そこに「歴史」が感じ取れるから。機関紙は6号、始まったばかり。先は長い。 A・T